



Title	日本語教育実習生の発達過程に関する質的研究：ダイアリ分析手法を用いて
Author(s)	朝倉，淳子
Citation	大阪大学，2004，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44773
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	あさ くら じゅん こ 朝 倉 淳 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 8 3 1 8 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 16 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科日本学専攻
学 位 論 文 名	日本語教育実習生の発達過程に関する質的研究－ダイアリ分析手法を用いて－
論 文 審 査 委 員	(主査) 助教授 青木 直子 (副査) 教 授 土岐 哲 教 授 真田 信治

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は日本語教師養成講座における教育実習生 3 名の内面の変化を実習生の書いたダイアリと指導教師によるインタビューを主たるデータとして 1 年間にわたって追ひ、変化の過程と原因を分析したものである。

第 1 章は序論で、留学生をはじめとする国内の日本語学習者の増加にともなう日本語教員の需要の増加にもかかわらず教師養成の方法論が確立されていない状況、一般の教師教育研究において理想的な教師像が「技術的熟達者」から「反省的实践家」へとパラダイム・シフトが起きていることを簡単に述べた上で、実習生が教師として発達していく過程を研究することの意義と、研究の方法論として実習生の書くダイアリをデータとすることの意義を説いている。第 2 章は教師教育に関する先行研究のレビューであり、学校教育の量的拡大が一段落し、教師の質的向上が求められるようになった教育界の状況、変化しつづける脱工業化社会における生涯教育の必要性、1960 年代の末から 70 年代にかけて起きた専門家への信頼の危機という社会的要因が、教師教育の求める教師像に変化をもたらした様子とともに、「反省的实践家」という概念がどのように生まれ、授業研究や教師教育の方法論にどのような影響を与えたかが解説されている。また、日本語教育における教師の専門性に関する議論がどのような変遷を経てきたかも検討され、従来の授業研究、および近年注目されている教師によるアクション・リサーチの問題点が指摘されている。第 3 章は研究方法論の解説で、本研究で採用されたダイアリ・スタディを定義した上で、その有効性と限界が教育面、研究面、両方から検討されている。第 4 章はデータの分析方法の解説で、1 年間にわたり収集された大量のデータの圧縮法として選択されたグラウンディッド・セオリーの概略を述べるとともに、それを採用した理由、本研究の目的に合わせて変更を加えた点が説明されている。第 5 章は調査の概要で、フィールドとなった教師養成講座のカリキュラムの概要、データ収集の方法が記されている。第 6 章はデータ圧縮の手順が述べられている。具体的にはダイアリをひとまとまりの内容ごとに分割し、小見出しをつけた上で、実習生の意識が何に向いているかを基準にカテゴリー化し、それぞれの意識がどのように変化したかを見るために時系列に並べて意識間の関係を明らかにした。このように構成化した意識の中から中心的なものを選び出し、その変化を記述するとともに、実習生の書いたダイアリとレポート、指導教師によるインタビューの中から意識の変化と発達の要因を探った。第 7 章から第 9 章は、それぞれ一人の実習生の 1 年間の変化を記述したもので、実習生のダイアリが具体的にどのように圧縮・コード化されたか、そこからどのような変化のパターンが見いだされたかが報告され、変化はなぜ起きたか、あるいは起きなかったかが分析されている。

第10章は、第7章から第9章までの分析結果をまとめ、3名の実習生の発達の共通点と相違点を指摘した上で、教育実習生の発達を支援するために指導教師がすべきこと、すべきでないことについて提言が行われている。それによれば、実習生は3人とも「教案どおりに授業を進めなくてはならない」という意識が強く、またそのために非常に時間を気にする傾向があった。これらがプレッシャーや不安となって、学習者の理解の状況を把握しつつ、それにあわせて臨機応変な授業展開を行うこととの間に葛藤を起こしていることがわかった。発達が認められた実習生AとBの共通点としては、1) 自分で自分の長所を見ている、2) 授業ごとに目標を設定している、3) 学習者の反応を見ることによって責任感が強まっていることがわかった。相違点としては、まず実習授業を通して何に対して問題意識を抱くかが異なる。また、その問題意識が授業での行動の変化につながるまでの過程も異なる。変化の過程のパターンは、らせん的発達、直列的発達(以上、実習生A)、脱皮的発達、葛藤を経た発達、意識の分化による発達(以上、実習生B)が認められた。実習生Cには意識の分化、意識間のつながり、意識の葛藤が見られず、発達がほとんど認められないことがわかった。その原因としては、教師や授業に関する強固なビリーフとともに不安や自信のなさ、自己評価を避け他者の意見をそのまま受け入れる傾向につながり、結果としてダイアリーに出来事や問題点の原因や解決策を書かない、授業でうまく行ったところや自分の長所を書かない、自分の気持ちを書かないという現象をひきおこし、それが発達を阻害していることもわかった。これらの分析結果を受け、本論文は教育実習の指導に以下の7つの提言を行っている。1) 指導教師が実習生一人一人の意識の状態を把握すること、2) 教案通りに授業が展開したかどうかを評価基準にしないこと、3) 時間調整のできるような教案の作り方を奨励すること、4) 実習生が自分の心の動きに敏感になれるような指導をすること、5) 指導教師による実習生の肯定的評価を実習生に伝えること、6) 実習生に授業ごとに目標を持たせること、7) 学習者の反応をポジティブに受け止められるよう実習生と学習者の間に信頼関係が築けるような配慮をすること。また、これらの目的を達成するためのダイアリの役割が強調されている。第11章は結論で、本論文の概要がまとめられている。

論文審査の結果の要旨

本論文は1年間という長期間にわたって教育実習生の書いたダイアリーや指導教師によるインタビューの中の語りを手がかりに実習生の内面の発達の軌跡を追ったという点で、従来にはない研究である。大量の質的データの圧縮の過程を詳細に記述しているという点で、分析過程の透明度も高く評価できる。3名という少人数のケース・スタディではあるが、これらの実習生たちの発達の形の共通点と相違点から導きだされた教育実習指導方法の提言は、今後の日本語教師教育に大きく貢献するものである。

この論文に足りないところとしては以下の3点があげられる。まず、日本の国語教育における教師教育の歴史と成果が考慮されていないこと。さらに、実習生の発達には、指導教師や他の実習生からの働きかけが影響していたことが示唆されているが、具体的な分析が行われていないこと。授業後の反省会の録音、指導教師のダイアリー、指導教師の実習生のダイアリーへのコメントなども記録として残っていたのだから、それを十分に使うべきであった。最後に、Cのような発達の見られない実習生の指導に関して、もっと踏み込んだ議論がほしかった。本論文で行われた7つの提言だけでCの問題は解決するのだろうかという検討は必要だっただろう。

こうした欠点はあるものの、本論文は博士論文として適当なレベルには達していると考えられる。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。